

ミッドワイフ

岸 本 兵 一

奨励者紹介[きしもと・ひょういち]

日本キリスト教団大住世光教会・泉伝道所牧師

「はっきり言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる。また、はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」

(マタイによる福音書 18章18—20節)

キャンパスと田園

坂を下って駅に向かう学生さんたちをかき分けながら言館に到着しました。学生さんたちの多くは賑やかなターミナル、京橋あたりまで直行する人が多いと思うのですが、スマホから目を離して、しばし、車窓から長く続くのどかな田園風景を愛でたりするようなことがあるでしょうか。私の教会は、同志社前から各停で二つ目の駅、大住（おおすみ）駅最寄りにあります。京田辺市が綴喜郡田辺町だった頃、ある若い主婦が、広報の「奥さん登場」というコラム欄に寄せた冒頭の一文を紹介します。「遠く見渡す大住ヶ丘の丘陵から、さわやかな緑の風を運んでくれる田園風景の中に、ほどよい調和のとれた佇まいのある大住に住まいする私です」。四十年近い昔のことですが、この風景は、先ほど坂道を下りて行った学生さんたちの目にも何ら変わることはないものです。

秋学期チャペル・アワーの統一テーマを「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」とお聞きしました。イエスが、若い日々を過ごしたガリラヤ地方を、「田舎」と言い換えたいと思いますが、田舎の人々の身近にある農作物を譬えに用いて人の在り様を語っておられることは想像に難くありません。土や肥料の匂いがしてきます。有機的な人と人との繋がり、あるいは、観念の玩具ではない「活ける」神との繋がりを強く感じさせます。同志社カレッジソングの一丁目一番地は、同志社建学の精神をぶどうの木、同志社を母校と慕う人たちをその枝に譬えています。後で、私が創詩しました日本語版カレッジソングをウクレレ伴奏付でご案内しますのでよろしくお付き合いください。

さて、アカデミックな雰囲気包まれた「丘の人」である皆さんに、この辺りが森であった時代のことをお伝えしたいと思います。と言っても縄文時代のことではありません。もっとも、すぐ近くに竪穴住居跡があるので紛らわしいことを言ってしまいましたが、田辺キャンパス前を走る山手幹線が豊かな緑の丘陵地であった頃、JR線沿いにある大住という平均的な農村地域で、神と人に仕えた先駆的な一人の女性の足跡をお伝えしたいと思います。

産婆(さんば)さん

本日の奨励題を「ミッドワイフ」とご案内しました。綴りは、「M、I、D、W、I、F、E」です。「Wife」は中世の

英語では「女」、「Mid」は、中間、仲立ちという感じに取りたいところですが、「共に」という意味だそうです。産前産後の妊婦と赤ん坊に寄り添う女性、つまり、助産師のことです。一昔前、「産婆さん」と呼ばれた女性のことです。

女性の社会進出が多くの困難を伴っていた時代でした。とりわけ、農村社会において自活した女性は、ほんの一握りでした。私の偏った記憶ですが、教員や役場の職員の中に数名見かけるくらいだったでしょう。しかし、別格な例が三つありました。はなはだ偏った記憶ですのでお許しください。一人は、美容師です。「パーマ屋の先生」です。熱いお釜みたいなものを頭にかぶるパーマから、熱を加えないコールドパーマが主流になり始めた頃です。その高い技術を習得した美容師は、見習いのお弟子だけでなくお客さんからも「センス（先生）」と呼ばれていました。もう一人は、洋裁の先生ですが、詳細は別の機会にゆずります。

そして、三人目が、助産師、産婆さんです。私は、1970年代の後半から教会に遣わされる牧師となりましたが、任地の教会には必ず助産師の信徒がいました。先駆的な明治の女性たちです。小柄な方が多かったのですが、高齢にもかかわらず、黒カバンを荷台にくくりつけ、大きな自転車に颯爽と乗っておられました。

旧約聖書の出エジプト記の中には、機知に富んだ助産師のことが記述されています。寄留者であったイスラエル人の増加を恐れたファラオが、生まれたばかりのイスラエル人の男の赤ん坊を殺せと命じたのですが、助産師たちは、「私たちが駆けつけた時にはすでに生まれていました」「出産には立ち会えませんでしたので、『生まれたばかり』の状態ではありませんでした」と、機転を利かせて赤ん坊の命を守りました。ちなみに、ヘブル語で助産師は、「メヤレデット」と、言うのですが、これは、「産む、生む」という動詞「ヤーラド」の名詞形です。そして、「ヤーラド」を強意に活用すると、「産むことを助ける、産婆として助ける」という意味になります。

その名はヲスエ

さて、前置きが長くなりましたが、産院ではなく家庭で出産することが当たり前であった時代、田辺キャンパスから徒歩でも行くことのできる大住という農村地域に、キリスト者として生きた一人の助産師がいました。私の仕える教会と保育園の創立に多大な貢献をなした第一番目の信徒の生涯をお伝えしたいと思います。その名は、宮本ヲスエ。平仮名で書くと、「をすゑ」となりますが、「ヲスエ」という名前からも想像いただけますように明治生まれの女性です。1902（明治35）年10月1日、香川県志度（しど）に生を受けました。私が敬愛して止まない平賀源内の出生地です。今日は四日ですが、一日の日曜日には、生誕115年の墓前礼拝を教会近くの共同墓地で執り行いました。

宮本ヲスエは、跡取りではありませんでしたので大阪に出て職を得ることとなります。鍵を商う大きなお店（たな）で働き始めました。私事で恐縮ですが、大正生まれの私の母は若い頃、奉公先の平賀源内ゆかりの家で厳しく行儀作法を仕込まれました。こういう環境に飛び込んで行く女性は、ロハ丁、手八丁。そして、例外なく無類の勉強好きと決まっています。宮本ヲスエもそのようなタイプの人でした。ヲスエさんと親しく呼びたいと思いますが、ヲスエさんは、お店でメキメキと頭角を現し、瞬間に女性奉公人のトップ、女中頭の座を占めることとなります。ある日、お店の主人、今でいうところの社長がヲスエさんと呼び

出しました。「何か望みはおまへんか。あんさん（貴女）の働きを評価したい。願うてること言うてみなはれ」。「産婆の学校へ行かせてください!」ヲスエさんは即答しました。「そんなもんでええのか」。主人が呆れたとのこと。

ヲスエの自立

ヲスエさんは自立することをいつも念頭に置いていたようです。ヲスエさんは、京都市内にあったキリスト教会が運営する産婆学校に入学することになります。その教会は、戦時中、弾圧の対象となったキリスト教の一派、ホーリネスの教会でした。純粋な信仰と平和を求めた教派でしたが当局の厳しい監視の下にありました。ヲスエさんは、そういう環境でキリスト教に出会います。その後、産婆学校を無事卒業したヲスエさんは、自力で田辺の地に開業し、町内の二、三の場所を経て大住の地に落ち着くことになりました。余談ですが、ヲスエさんの大住の住居は、「愛民義塾」という自由民権運動の講義所跡地です。

戦時中、信仰を棄てるようにと当局に呼び出されたりしましたが、ヲスエさんは、マイペースでした。やがて、皆さんもさまざまなメディアで知るところのあの戦後の時代となります。パラダイム、意識枠が、一晩で180度転換したあの時代の幕開けです。ヲスエさんは、豊かな助産師の経験を備えた四十歳半ばで終戦を迎えました。命を粗末にした時代、「産めよ増やせよ」のスローガンの下、「消耗品」としての命の時代から「個」としての命が尊ばれる時代を迎えました。ヲスエさん大忙しの毎日となりました。

ヲスエのサロン

ヲスエさんはクリスチャンでしたが、どこかの教会に属することはありませんでした。大住の地に教会ができることを願っていました。その前段階として、自宅を開放し、近隣の人々を招きました。小さな子どもたちもヲスエのサロンの常連でした。取材して分かったことですが、小さな子どもたちには、お菓子や果物、年長の子どもや青年たちには、ヲスエさんが挽いたコーヒーなどが振る舞われたそうです。ヲスエさんは、当時の人にしては、実にモダン、ハイカラな女性だったのです。教会や保育園の記念写真はスーツ姿です。スカートはもちろん、タイトスカートで決めています。生き馬の目を抜く大阪商人のお店でキャリアウーマンとして活躍していたのですから、なるほどと頷けます。

ヲスエ神学生と出会う

ヲスエさんの前に一人の青年が現れました。同志社大学神学部の学生です。後に、作家の三浦綾子さんがその生き方を絶賛した「ちいろば牧師」のニックネームをもつ榎本保郎という身も心もボロボロで戦地から帰ったばかりの神学生でした。神学生といっても二十歳を過ぎて同志社高校に入り、学生でありながらも伏見に教会を設立した熱血牧師です。二人だけの祈り会が始まりました。二人の祈りは、キリストの愛を具体的に実践する場が与えられることに集中しました。

ヲスエと青年たち

その頃の農村では、稲刈りなどの農繁期、小さな子どもを十分に構ってやれないという深刻な悩みがありました。あぜ道に置いた「畚（ふご）」という藁で編んだサークルの中に小さな子ども入れ、ふかし芋を

持たせ、日が暮れるまで田畑で作業をしなくてはならないようなことがありました。ヲスエさんは地域の子どもたちのことが気になって仕方ありません。保育園の必要性を感じ始めました。榎本神学生は、自らの体験の中から聖書に救いを見出したことを語り始めました。村の青年たちが集まり始め保育園建設の祈りが共有されました。青年たちの親は、「そのような大それたことを青二才が考えてはならん。町の議員さんたちに任せておけばよい」と釘を刺しましたが、ヲスエさんの叱咤激励を受けて青年たちの心は募金活動へと導かれていきました。「あんた達、田辺の駅へ行って、電車から降りて来る人、一人ひとりに大住には保育園が必要ですよって、10円でもよいからもうて来なさい」。誇張されたヲスエさんの逸話です。まるで、新島が農夫からもらった2ドルにも通じるような逸話です。

保育園と教会の設立

青年たちの願いは叶いました。榎本神学生の愛すべき純朴な人柄に、惜しめない援助の手を差し伸べた当時の同志社大学教授マックナイト宣教師が、田辺町との間に土地建物の賃貸契約を交わし、1952（昭和27）年、榎本保郎を園長とする大住保育園設立の運びとなりました。牧師夫人が弾くオルガンに耳を澄まし目を閉じる。ヲスエさん念願の「大住世光教会」の礼拝が始まりました。有能なクリスチャンの保育士が集まり、高いレベルの保育が展開されました。情操豊かな子どもたちの元気な声が、のどかな田園に響き渡りました。

二代目園長となった元日本キリスト教団総会議長の後宮俊夫牧師は、保育園の30年史の冒頭を、このような賛辞で飾っています。「大住保育園の創設は、大住の青年たちの郷土愛に発しています」。三代目の難波巖牧師は、50年に及ぶ園長と理事長の重責を担いました。晩年、一人の姉妹に病床から洗礼を授けて2013年にその生涯を閉じました。

ヲスエさんはこれら三人の牧師たちと共に祈る日を一日も欠かしませんでした。ヲスエさんは、子どもを育てるように牧師とその夫人を育てました。非常に稀有な例と言わねばなりません。それは、彼女の信仰が一貫していたからです。繋がるべき所に繋がっていたからと言えるのではないのでしょうか。

ヲスエに繋がる

最後に、新婚時代の10年間で牧師夫人、保母として教会と保育園に関わった後宮松代夫人の言葉を紹介します。「50年前、後宮と私は全く未知の世界である田辺町大住の地に世光教会より遣わされました。世光教会は創立四年目にして信徒が20名ぐらいの時に大住伝道所を生み出したのです。開拓伝道と新設の保育園で働き、無我夢中で榎本保郎夫妻を模範として、ただ一人の信徒である宮本ヲスエさんと共に、祈り働きました」（『創立50周年記念誌』日本基督教団世光教会 2002年 より抜粋）。

毎日曜日、私は、ヲスエさんの墓前で妻と一緒に祈りを捧げています。赴任して四年になりますが一度も欠かしたことがありません。共同墓地の入り口に八柱の墓標があります。いずれも大住の地から戦いの場に送られた若い兵士たちのものです。この人たちも無事、戦地から帰っていればヲスエさんや「ちいろば牧師」の祈りの輪に繋がっていたのかと思うと胸が熱くなるのです。

さて、冒頭にご案内しました同志社カレッジソング（作曲 C.Wilhelm）の日本語版を共に歌いまして奨

励の幕にしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(1)

「良心の全身に 充満したる丈夫の 起こり来たらんことを
起こり来たらんことを」 新島襄は言った 100年先のわたしに
どこへ行っても どんな時も 教えを守れと JOE は言った

(2)

「倜儻不羈(てきとうふき)なる書生を 圧束せず務めて」 ひとりが大切だ
繋ぎ留(とど)めよと 新島襄は言った 100年先のわたしに
神を愛して 人に仕え 型にはまるなと JOE は言った

(作詞 岸本兵一)

2017年10月4日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録